

日本英文学会九州支部 第64回大会

期日 2011年(平成23年)
10月29日(土)・30日(日)

場所 大分大学(旦野原キャンパス)

日本英文学会九州支部

〒819-0395 福岡市西区元岡744番地
九州大学大学院言語文化研究院
太田一昭研究室内
TEL/FAX 092-802-5726
E-mail: k-jimukyoku@mx5.canvas.ne.jp
HP: <http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp>

(大会会場は、旦野原キャンパスです。)

大分大学広域地図及び各キャンパスまでの交通案内

I. 旦野原キャンパスへ

○JR (豊肥本線利用)

「大分駅」→「大分大学前駅」下車後、徒歩約5分

○バス (大分バス利用)

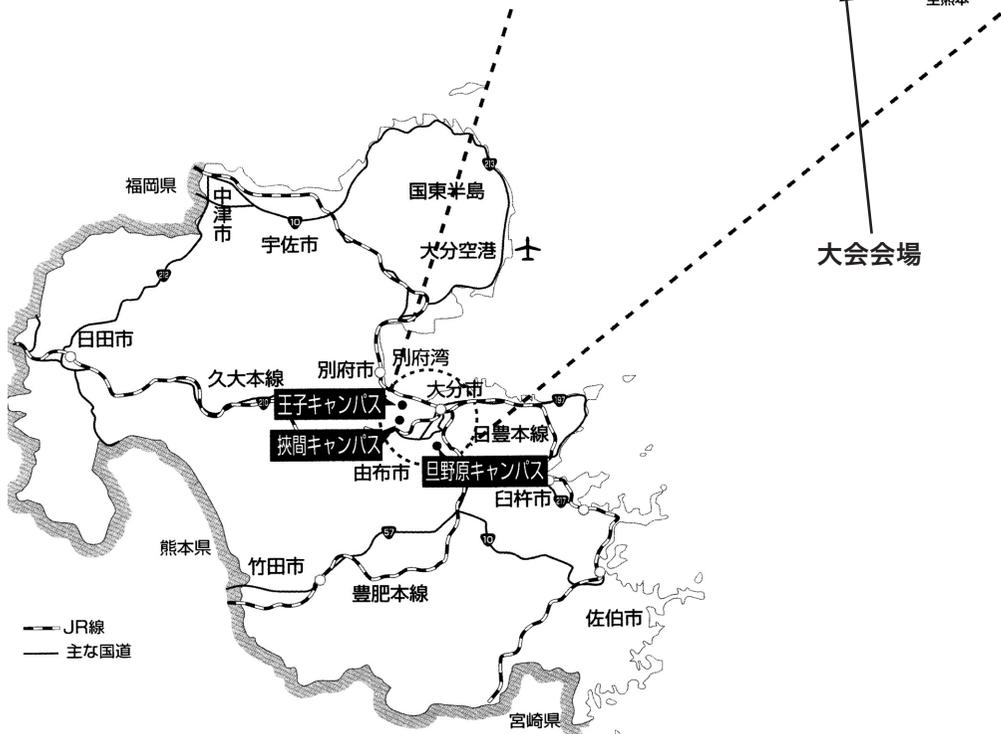
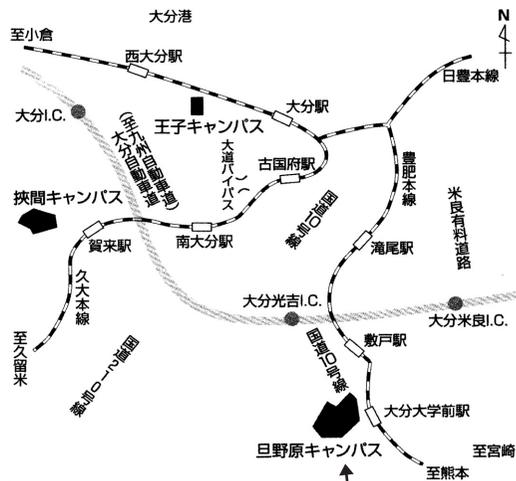
「大分駅前」または「トキハデパート前」から

1. 「大南団地・高江ニュータウン」 「大分大学」 行きに乗り、
「大分大学正門」または「大分大学 (構内)」 下車
2. 「戸次」「臼杵」「竹田」「三重」「佐伯」 行きに乗り、
「大分大学入口」 下車

II. 狭間キャンパスへ

○バス (大分バス利用)

「大分駅前」または「トキハデパート前」から「大学病院」
行きに乗り、「大学病院」下車

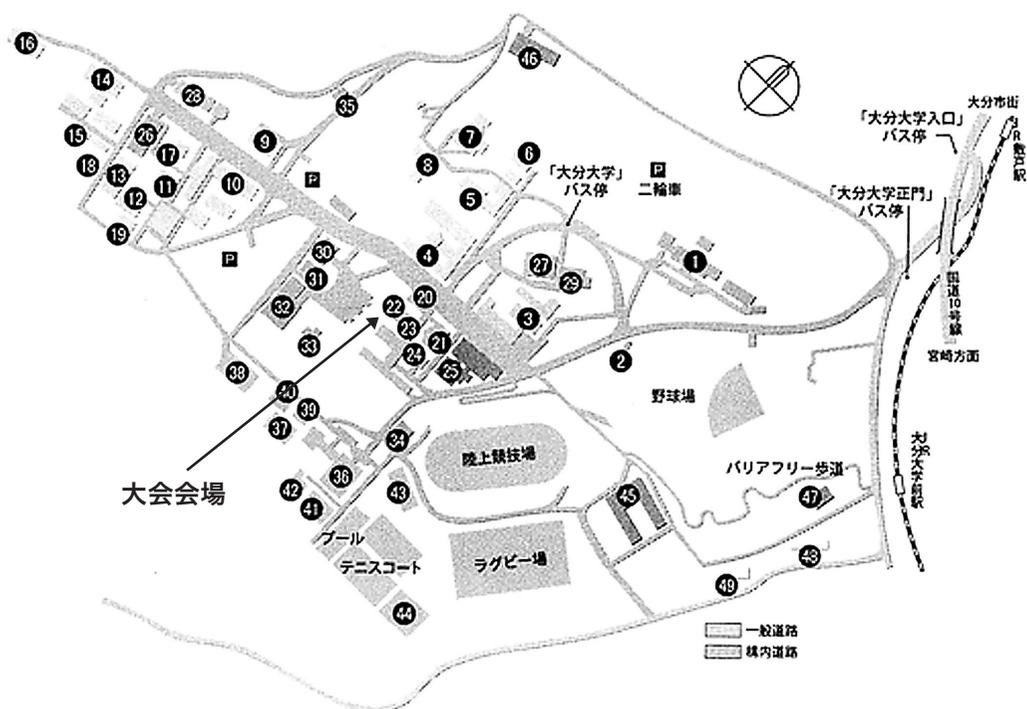


宿泊施設情報については、下記の英文学会九州支部のホームページをご覧ください。

<http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp/>

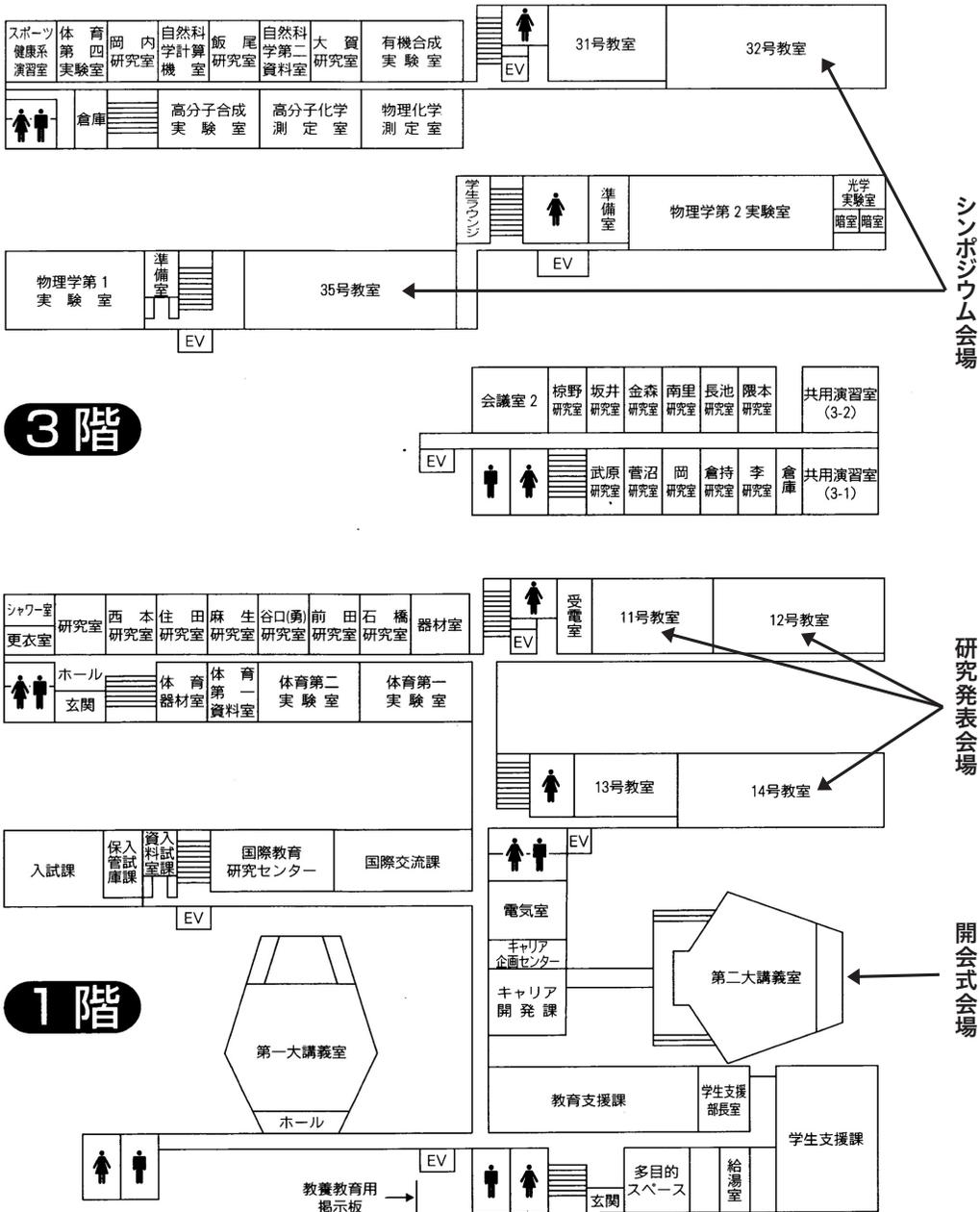
巨野原キャンパス

(②が開会式会場となる第2大講義室です。この講義室のある教養教育棟が大会会場となります。)

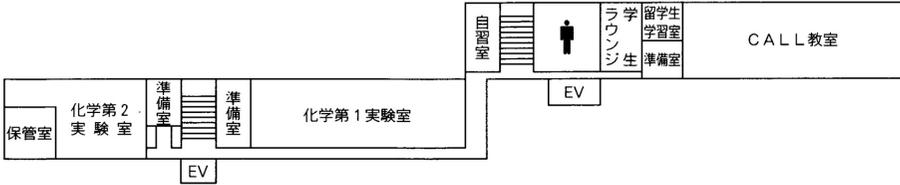
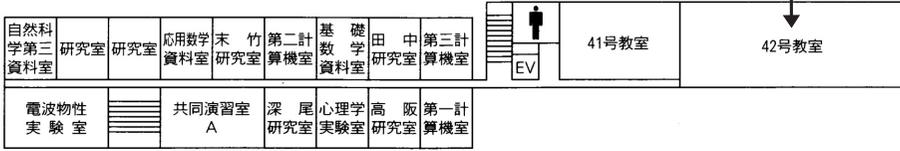


- ② 門衛所
- ③ 事務部／講義室／研究棟(経済学部)
- ④ 事務部／講義室／研究棟(教育福祉科学部)
- ⑳～㉔ **教養教育棟**
- ㉒ **第2大講義室**
- ㉕ 図書館／学術情報課
- ㉓ 文科系サークル共用施設
- ㉑ コンビニエンスストア
- ㉔ 福利施設(売店・食堂)
- ㉓ 器楽共用施設
- ㉒ 体育系課外活動共用施設
- ㉑ 学生寮

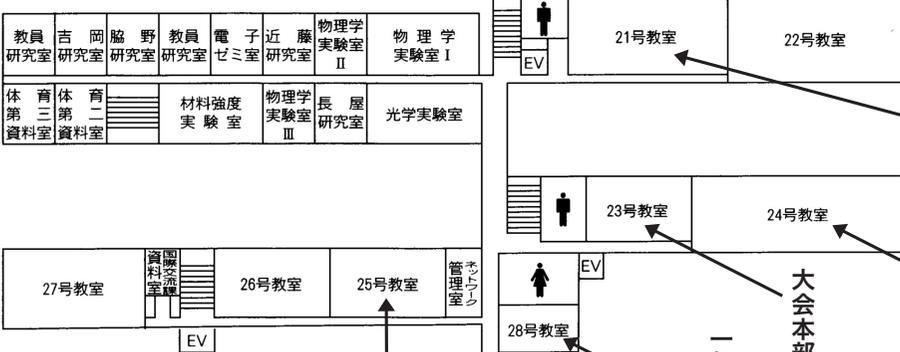
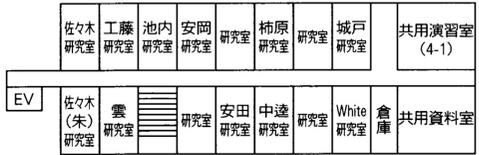
教養教育棟平面図



シンポジウム会場

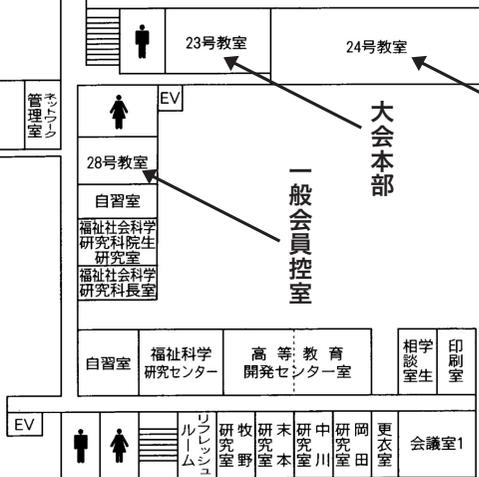


4階



2階

発表者・司会者・講師控室



研究発表会場
書籍展示会場

大会本部

一般会員控室

会場案内

大分大学 旦野原キャンパス教養教育棟

(〒870-1192 大分県大分市大字旦野原700番地)

10月29日(土)

開会式 (13時) 第2大講義室

研究発表 (①13時30分 ②14時10分)

第1室(イギリス文学) 11号教室

第2室(アメリカ文学) 12号教室

第3室(英語学) 14号教室

シンポジウム (15時～17時20分)

第1部門(イギリス文学) 35号教室

第2部門(アメリカ文学) 32号教室

第3部門(英語学) 42号教室

懇親会 (18時30分～20時30分)(会費5,000円) 大分第一ホテル

10月30日(日)

研究発表 (①9時20分 ②10時 ③10時40分 ④11時20分 ⑤12時)

第1室(イギリス文学) 11号教室

第2室(イギリス文学) 12号教室

第3室(アメリカ文学) 14号教室

第4室(英語学) 21号教室

特別講演 (13時30分) 第2大講義室

閉会式 (15時) 第2大講義室

受付 1階ホール

(13号教室入口東側通路)

研究発表者・司会者・シンポジウム講師控室 25号教室

一般会員控室 28号教室

書籍展示会場 24号教室

大会本部 23号教室

日本英文学会九州支部第64回大会プログラム

時：2011年10月29日(土)・30日(日)

所：大分大学(旦野原キャンパス教養教育棟)

第1日 10月29日(土)

(受付は正午より教養教育棟1階ホールにて行います。受付では年会費の納入はできません。)

開会式 13時より(第2大講義室)	司会 九州大学教授	吉 村 治 郎
開会の辞	支部長・九州大学教授	太 田 一 昭
挨拶	大分大学学長	北 野 正 剛
事務局報告	事務局長・九州大学教授	松 村 瑞 子
優秀論文賞選考報告	編集委員長・熊本県立大学教授	村 里 好 俊

研究発表(①13時30分 ②14時10分)

第1室(11号教室)	司会 長崎県立大学教授	岩清水 由美子
1. 異文化の接触と混淆——Joseph Conradの <i>Lord Jim</i> における東洋表象	九州大学大学院博士後期課程	藤 山 和 久
	司会 福岡大学教授	山 内 正 一
2. 語ることを物語る——『ドン・ジュアン』にみるメタフィクション	北九州市立大学大学院博士後期課程	山 口 裕 美
第2室(12号教室)	司会 鹿児島女子短期大学教授	高 島 まり子
1. Hester Prynneの恋愛と結婚	九州大学大学院博士後期課程	生 田 和 也
	司会 宮崎大学准教授	井 崎 浩
2. そして路上へ—— <i>In Country</i> における3つの変則性とその効果	熊本県立大学博士後期課程	矢ヶ部 あかり
第3室(14号教室)	司会 尚綱大学教授	廣 江 顕
1. 英語の二重目的語構文に関する統語的考察	九州大学大学院修士課程	大 塚 知 昇
2. 空所化構文と多重間接疑問縮約の統語構造について	九州大学大学院博士後期課程	高 木 留 美

シンポジウム(15時～17時20分)

第1部門「イギリス文学」(35号教室)

William Shakespeare 劇の材源と改作

司会・講師	鹿児島大学准教授	大 和 高 行
講師	鳴門教育大学専任講師	杉 浦 裕 子
講師	鹿児島大学准教授	丹 羽 佐 紀
講師	鹿児島国際大学教授	小 林 潤 司
講師	鹿児島国際大学准教授	山 下 孝 子

第2部門「アメリカ文学」(32号教室)

テネシー・ウィリアムズと身体

司会・講師	熊本県立大学准教授	坂井隆
講師	熊本大学准教授	永尾悟
講師	関西学院大学教授	新関芳生
講師	東京大学教授	内野儀

第3部門「英語学」(42号教室)

結果構文研究の現状と展望

司会・講師	九州大学准教授	江口巧
講師	中村学園大学准教授	木原美樹子
講師	久留米大学准教授	安藤裕介
講師	中村学園大学教授	山根一文

懇親会(18時30分から20時30分まで)

場所 大分第一ホテル(JR大分駅を背にして目の前)8階「ル・ファール」の間(会費5,000円)

第2日 10月30日(日)

(受付は9時より教養教育棟1階ホールにて行います。受付では年会費の納入はできません。)

研究発表(①9時20分 ②10時 ③10時40分 ④11時20分 ⑤12時)**第1室(11号教室)**

1. 【発表なし】

	司会 九州大学教授	徳見道夫
2. マクベスと魔女たちの関係性—— サバトを通じて ——	西南学院大学大学院博士後期課程	雨森未来
3. ゼロからの脱出—— 変化する女性性の描写 ——	福岡女子大学大学院博士後期課程	國崎倫
	司会 北九州大学教授	田部井世志子
4. 脅かす子ども —— 『フランケンシュタイン』における擬似的親子と植民地主義 ——	九州大学大学院博士後期課程	浅田えり佳
5. トールキンのカトリシズム	九州大学大学院修士課程	島居佳江

第2室(12号教室)

1. 【発表なし】

	司会 九州大学准教授	鵜飼信光
2. オースティンの『説得』における「ロマン派」詩人的部分	北九州市立大学大学院修士課程	蓮香ひとみ
3. 「遊び」の国のアリス —— ルイス・キャロルの現実世界 ——	北九州市立大学大学院修士課程	堀秀暢

- 司会 水産大学校准教授 高 本 孝 子
 4. *Atonement*における救いについての考察——カルヴァン主義の立場から見た贖罪——
 北九州市立大学大学院博士後期課程 三 隅 初 美

5. 【発表なし】

第3室 (14号教室)

1. 【発表なし】

- 司会 佐賀大学准教授 名 本 達 也
 2. 19世紀後半アメリカのジャンヌ・ダルク——*The Bostonians*における女性の声・精神・身体——
 九州ルーテル学院大学専任講師 砂 川 典 子
- 司会 北九州大学教授 前 田 譲 治
 3. 成り代わる視点——*Dangling Man*における他者観——
 九州大学大学院修士課程 幸 山 智 子
- 司会 西南学院大学教授 宮 本 敬 子
 4. 分解する物語——*The Bluest Eye*における暴力の連鎖——
 九州大学大学院修士課程 吉 田 希 依
- 司会 福岡大学教授 大 島 由起子
 5. 被爆者と「母国」アメリカ
 九州大学大学院博士後期課程 永 川 と も 子

第4室 (21号教室)

司会 西南学院大学教授

藤 本 滋 之

1. QR in Phase Theory

九州大学大学院博士後期課程

下 仮 屋 翔

司会 福岡大学教授

久 保 善 宏

2. 文断片における再帰形の直接生成分析

九州大学大学院博士後期課程

永 次 健 人

3. 副詞の派生に関する統語的分析

九州大学大学院修士課程

安 松 修 平

司会 長崎大学教授

西 原 俊 明

4. 日英語の場所句構文に関する統語分析

九州大学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員DC2

前 田 雅 子

5. 英語における主語内寄生空所構文の考察

九州共立大学共通教育センター専任講師

黒 木 隆 善

特別講演 13時30分より (第2大講義室)

司会 熊本県立大学教授

村 里 好 俊

東京女子大学大学院人間科学研究科教授 楠 明 子

シェイクスピア劇の「女」たちとポピュラー・カルチャー

閉会式 15時より (第2大講義室)

挨拶

大分大学教授

金 子 光 茂

〈第1日〉 10月29日(土)

研 究 発 表

第 1 室 (11号教室)

司会 長崎県立大学教授 岩清水 由美子

1. 異文化の接触と混淆——Joseph Conradの*Lord Jim*における東洋表象——

九州大学大学院博士後期課程 藤 山 和 久

Joseph Conradの前期作品*Lord Jim*(1900)は、主にマレー諸島を舞台とした小説である。本作品をめぐっては、難船し乗客を見捨てて逃げたことに対するJimの罪意識とその償いという主題で論じられることが多い。あるいは、祖国ポーランドを捨てイギリスに帰化した作者Conradの罪意識とJimのそれとを重ね合わせて考察されてもきた。いずれの場合にせよ、小説のタイトルが示すように、自己の英雄的な理想像にとりつかれたイギリス人(西欧白人)男性としてのJimの主人公像が、これまで行われてきた考察の主眼であると言っても過言ではない。

本発表では、そのようなJimにおける理想と現実に着目するだけでなく、彼にとって祖国から遠く離れた異国の社会集団であるマレー世界が担う役割やその意味についても考えてみたい。考察の具体的な手立てとしては、周縁的な存在として描かれるマレー人やその部族の共同体にも焦点を当てつつ、Jimや語り手Marlowの属する白人西欧社会の共同体との関係について言及し、異文化間の接触や混淆の問題について触れたい。

Robert Hampsonが指摘するように、Conradの小説作品においてマレー世界は重要な場所であり、「異文化」をいかに表象するかという点は作者が繰り返し直面してきた大きな問題であると言える。このことは、「Conradには祖国を喪失した周辺者感覚が驚くほど根強く残っていた」とEdward W. Saidが論じるように、Conradの境涯が大いに関わっていると考えられる。

また、本作品が執筆された19世紀末から20世紀初頭の時代は、周知のように、西欧列強による植民地支配が絶頂にあり、本作品の舞台であるマレー世界もヨーロッパ世界の領地下・支配下にあった。そうした時代におけるエトスが、小説作品の中にも浸透していることは否めないだろう。そのような観点から、生粋のイギリス人ではなく「ポーランド出身の祖国喪失者」(a Polish expatriate)としてのConradが、本作品における「東洋表象」を通して、植民地主義の社会や文化をいかに捉えていたのかという点についても考察したい。

司会 福岡大学教授 山 内 正 一

2. 語ることを物語る——『ドン・ジュアン』にみるメタフィクション——

北九州市立大学大学院博士後期課程 山 口 裕 美

『ドン・ジュアン』(1819-24)は、未完でありながらもバイロンの最高傑作であり、その諷刺の才能が遺憾なく発揮されたと評されている。本作品は、当然のことながら、主人公ドン・ジュアンの物語である一方で、語りがその主題から脱線することが特徴的である。例えば、自意識的な語り手「私」は、物語を語る伝統的な形式に言及した上で、自らの物語の形式を説明する。このように詩のあり方を意識しつつ、プロット中で自らの表現を具体化するという手法をとる。このプロットを超えた視点から語るメタフィクションは『ドン・ジュアン』の根幹をなしている。そのため、語りについての論考は、今までに数多く生み出されている。

本発表の目的は、この語り手によるメタフィクションが、語る行為に対する不安であると示すことである。そもそも文学において「語り(物語)」とは、天啓の口承にはじまり、語った者が誰であるかは意味を持たなかった。すなわち、作品は語った者の独自の言葉である必要がなく、自己と他者に区別をもうける必要がなかったのである。しかしながら、新古典主義の反動もあいまって、19世紀では作家の自意識が高まり、ロマン主義では作家としての個人が重んじられるようになった。その中で、作家が物語を語ろうとした時に、その作品が作家固有のものであるか否かという問題に突きあたる。すなわち、自らが語っている言葉が、すでに他者に語られたもので、その思想を繰り返しているだけではないかという不安がつきまとう。

バイロンは『ドン・ジュアン』執筆時にはすでに、詩劇『マンフレッド』において、悲劇的モードで実存的不安を表現している。一方、『ドン・ジュアン』において、この実存的不安は喜劇的モードに切り替わった状態で内包されている。本論では、自らの固有性を斜に構えながら意識的に書くというバイロンの「ポストロマン派」的自我を論証したい。また、『ドン・ジュアン』第1、2巻は匿名で出版された。そのため第1巻最終連には、匿名出版であった事実を踏まえなければ、文脈的に理解しがたい、語り手の自意識があらわれている。そこで、この匿名出版と自意識のあり方に焦点をあてるために、第1巻を中心に取り扱う。

第 2 室 (12号教室)

司会 鹿兒島女子短期大学教授 高 島 まり子

1. Hester Prynne の恋愛と結婚

九州大学大学院博士後期課程 生 田 和 也

The Scarlet Letter が姦通とそれ以降の関係者たちの人間関係をめぐる物語である以上、そこには否応なしに、男女の恋愛、性愛、結婚といったテーマが浮かび上がってくる。但し、作中において Hester と Dimmesdale の恋愛が直接的に語られる機会は極端に少なく、また批評においても、*The Scarlet Letter* における恋愛のテーマはこれまであまり語られてはこなかった。

The Scarlet Letter の物語は、Hester と Dimmesdale が密談をする森の場面で、大きな方向転換を見せる。それまで内密にされていた Chillingworth の正体が語られ、Hester と Dimmesdale によって共同体からの逃亡計画が語られる場面である。森の中で再会を果たした Dimmesdale に対し、Hester は “What we did had a consecration of its own” と述べるが、ここで Hester の言う「神聖なもの」(consecration) とはいったい何を指すのか。本発表はこの問いに端を発し、*The Scarlet Letter* における恋愛と結婚の文脈を読み解いていく。

西欧における恋愛観の変遷において、*The Scarlet Letter* が執筆された19世紀当時は、Romantic Love という概念が一般に普及した時代であった。また当時の文学市場は、Leslie Fiedler の言う “Sentimental Love Religion” の時代でもあった。19世紀アメリカにおいて、男女の恋愛や結婚というテーマは非常に一般的なものであったといえるだろう。実際に、先に挙げた Hester の発言や、Dimmesdale と Pearl に関する彼女の言動には、当時の恋愛・結婚の文脈に一致するものが多く見られる。本発表は、作品執筆当時の恋愛・結婚の文脈をもとに、Hester Prynne という人物を読み直す試みである。

2. そして路上へ——*In Country*における3つの変則性とその効果——

熊本県立大学博士後期課程 矢ヶ部 あかり

Bobbie Ann Mason (1940-) による *In Country* (1985) は、ヴェトナム戦争という題材を、アメリカ文学において特徴的なロードナラティブを用いて描いた小説である。主人公のSamは、ヴェトナム戦争の探求行為を通して、少女から女性へと成長していく。また、彼女の戦争探求行為は、同時に、不在の父親や自己をも探るものとなっており、このことは、Mason自身が大きな興味を抱いていた少女探偵の探偵行為と類似すると言える。*In Country*は、ロードナラティブ、家庭小説、少女探偵小説という、大衆文学的な要素が様々な織り合わされた作品なのである。しかし、それらの大衆性を担う特徴は、各々従来の定義からはいくぶん変形された形で用いられている。本発表では、その変則性に注目しながら、大衆文学的な要素を持ち込んで戦争を描くということが、作品にどのような効果をもたらしているのかを、ジェンダーと戦争との関係の上で考察する。

ヴェトナム戦争は、アメリカ戦争史上、他と質を異にする戦争だといわれているが、その戦争を、大衆性が強い、従来文壇から文学として劣るものだとされてきた家庭小説やロードナラティブ、また、探偵小説の特性を用いて描くことは、戦争を特殊な出来事としてではなく、誰もが抱える問題として扱うための手段であると考えられる。誰もが見慣れた、大量消費のポストモダンの光景の中で量産されたイメージを最大限利用し、戦争という深刻な題材を、敢えて大衆的な形式を用いて描くことは、文学における大衆性の解釈を再考させる。そして、80年代という家族崩壊がささやかれた時代に、レーガンの謳う家族の形を全く踏襲しない家族が問題に向き合おうとする姿を描くことは、家族崩壊という言葉を揺るがすだけでなく、大衆が置かれた現実を示す。このことは、私たちに共感を与え、また、戦争だけではなく、家族の問題を考える機会を与えるのではないだろうか。

第 3 室 (14号教室)

1. 英語の二重目的語構文に関する統語的考察

九州大学大学院修士課程 大 塚 知 昇

英語の二重目的語構文では、一般に間接目的語をWh句として抜き出すことができないといわれている。これと対照的に、to前置詞与格構文では、間接目的語に相当すると考えられるto前置詞の後の要素をWh句として抜き出すことができる。また、to前置詞全体を前置することも可能である。

- (1) a. *Who did you give t a book?
- b. Who did you give a book to t?
- c. To whom did you give a book t?

他方、直接目的語は、二重目的語構文においても、Wh句としての抜き出しが容認され、to前置詞与格構文においても、この抜き出しは問題とならない。

- (2) a. What did you give John t?
- b. What did you give t to John?

また、Barss & Lasnik (1986) において、以下の現象が指摘された。

- (3) a. I presented/showed Mary to herself.
 b. *I presented/showed herself to Mary.
 c. I gave/sent [every check]_i to its_i owner.
 d. ??I gave/sent his_i paycheck to [every worker]_i.

照応形、束縛代名詞の例であり、その説明には、一般に非対称的な構成素統御関係が用いられる。そのため、二重目的語構文を考察する上で、間接目的語が直接目的語を非対称的に構成素統御する構造を想定する必要がある。

上記の抜き出しの問題に関しては、Thematization/Extraction (Th/Ex) の導入による説明 (Oba (2005))、R-dative-shift の導入と to の出現による説明 (Breuning (2010)) などが試みられてきたが、PF 移動、inclusiveness condition などミニマリストプログラムの観点から様々な問題が残されているように思われる。本発表では、これらの分析とは異なり、 ϕ 前置詞を想定することにより、音声的な側面から、抜き出しの不可能性の説明を試みる。

2. 空所化構文と多重間接疑問縮約の統語構造について

九州大学大学院博士課程 高木留美

これまでの英語の空所化構文における先行研究には、主に (1b) の右方移動分析 (Jayaseelan 1990) や (2b) の ATB (Across-the-Board) 移動分析 (Johnson 2009) が挙げられる。

- (1) a. John talked about Bill and Mary about Susan. (Abe and Hoshi 1997)
 b. [_{TP}John talked about Bill] and [Mary [_{VP}[_{VP} talked t_i] about Susan_i]].
- (2) a. Some will eat beans and others rice. (Johnson 2009)
 b. [_{TP}Some_i will [_{PredP} [_{VP} eat t_i] [_{VP} t_i [_{VP} [_{VP}] beans_i] and [_{VP} [_{VP} [_{VP}] rice_i]]]]]

(1b) の右方移動分析では、後続節の動詞に続く要素が VP に右方付加し、その後 VP が PF 削除される。また、(2b) の ATB 移動分析では、先行節と後続節は vP の等位接続から成り、それぞれの VP がさらに上位の PredP の指定部へと移動する。しかし、これらの分析には話題化や非構成素を伴う空所化の分析が適切におこなえない点において問題がある。Takaki (2011) ではその問題を解決すべく後続節の残留要素が CP 領域 (Spec-FocP) へ焦点移動するとする代案を提出した。本発表では、Takaki (2011) を基に、新たに多重の残留要素が生じるという点や、前置詞残留が許されないという点において類似している空所化構文と多重間接疑問縮約について考察する。

- (3) a. Charley writes with a pencil and John with a pen. (Johnson 2006)
 b. John was talking, but I don't know to who about what. (Richards 1997)

しかし、これらの構文には違いもあり、例として空所化構文は (3a) のように埋め込み節内に生じないのに対し、一般的に多重間接疑問縮約は埋め込み節内に生じる。また、これらの島からの抜き取りの可能性についても着目し、両構文の類似性と違いを統語構造に基づき説明する。

参考文献：

- Abe, Jun and Hiroto Hoshi (1997) "Gapping and P-stranding," *Journal of East Asian Linguistics* 6, 101-136.
 Johnson, Kyle (2006) "Gapping," *The Blackwell Companion to Syntax* 2, ed. by Everaert Martin and Henk van Riemsdijk, 407-435, Blackwell Publishing, Malden, MA.
 Johnson, Kyle (2009) "Gapping Is Not (VP-)Ellipsis," *Linguistic Inquiry* 40, 289-328.
 Richards, Norvin (1997) *What Moves Where When in Which Language?*, Doctoral dissertation, MIT.

シンポジウム

第1部門 (35号教室)

イギリス文学

William Shakespeare 劇の材源と改作

司会・講師	鹿児島大学准教授	大 和 高 行
講師	鳴門教育大学専任講師	杉 浦 裕 子
講師	鹿児島大学准教授	丹 羽 佐 紀
講師	鹿児島国際大学教授	小 林 潤 司
講師	鹿児島国際大学准教授	山 下 孝 子

本シンポジウムでは、シェイクスピア劇とその材源あるいは改作との関係に焦点を当てることで、それぞれの特徴を浮き彫りにしながら、それら文学テキストの豊饒さや問題点について探っていきたい。

シェイクスピア劇の材源に関する研究は英米において古くから盛んだが、最近是我が国においても、たとえば福岡大学の鶴田学氏による優れた材源研究“‘The Benefit of Contentation’: A Possible Source for *The Merchant of Venice*” (*Notes and Queries*, 57: 3 (2010), 366-7) 等があり、シェイクスピアの劇作法について新たな知見をもたらしてくれる。他方、シェイクスピア劇の改作については、従来は(少数の例外を除けば、)英米のみならず我が国においても「真正なるシェイクスピア」を損なうものとして、あまり好意的に評価されてこなかった感がある。だが、近年では、シェイクスピア劇の特徴を明らかにするためだけではなく、シェイクスピア劇のテキストを相対化する目的で、比較研究が盛んに行われている。

シェイクスピア劇の材源と改作の全体像をくまなく俯瞰することが理想だが、限られた時間内ですべてのテキストを扱うことは物理的に不可能である。それゆえ、講師陣には、シェイクスピア劇の材源か改作かのいずれかを選んでもらい、各々の専門領域と関心を活かした報告を行ってもらうよう要請した。杉浦氏は、シェイクスピア劇の種本の一つとして知られるウィリアム・ペインターの『悦楽の宮殿』所収の散文物語を取り上げ、ノヴェルで描かれる女性が劇テキストではどのように変わるのかを、シェイクスピアとジョン・ウェブスターにおいて検討する。丹羽氏は、『オセロー』の種本として知られるジラルディ・チンティオの『百物語』所収の散文物語を扱い、チンティオのムーア人が、『オセロー』上演当時の様々な歴史的状況を具現化する人物へと発展した様子を考察する。大和は、役者兼劇作家であったコリー・シバーの手になるシェイクスピア改作劇『リチャード三世』を、18世紀初頭の劇場・職業的女優・歴史書等との関係において読み解く。小林氏は、自身も役者であった J. P. ケンブルの演技論・演劇観の投影を、シバー版の改訂版にケンブルが施した書き込みと、彼

のシェイクスピア論に見る。山下氏は、バーナード・ショーによる『シンベリン』終幕の書き直しの意図を再確認しながら、シェイクスピアの『シンベリン』をオリジナルならしめている要素について考察する。本シンポジウムで扱うテキストの多くは、わが国においては翻訳すらおぼつかない状況であるが、シェイクスピア劇の材源と改作についての研究の意義と将来に向けた可能性を示すことができると考えている。

ノヴェルの女性と舞台の女性 ——ウィリアム・ペインターの『悦楽の宮殿』から——

鳴門教育大学専任講師 杉浦裕子

ウィリアム・ペインター (William Painter, c.1525-1594) がロンドン塔の武器管理役人として勤める傍ら、ラテン語、ギリシャ語、フランス語、イタリア語から英訳した百余りのもの物語を所収した『悦楽の宮殿』(*The Palace of Pleasure*, 1566-67) は、トマス・マロリーの『アーサー王の死』(1485) とトマス・ノースのプルターク『英雄伝』の英訳(1579) の間に存在する、最も規模の大きい英語の散文物語である。それはまた、エリザベス朝の劇作家たちにとって劇の筋や詩の宝庫となった点でも貴重なテキストである。ペインターはイタリアの文学作品を実質的にイギリスに紹介した最初の人物であり、『悦楽の宮殿』の大成功は、大陸のノヴェルの英訳という流行、そして、ノヴェルとエリザベス朝演劇の融合をもたらした。

本発表では、簡潔・直接的な文体で控えめに語られるペインターの『悦楽の宮殿』所収のノヴェルから、それを種本としたシェイクスピアの劇作品、およびウェブスターの劇作品への変容を、特に女性登場人物の描かれ方の変化に注目して分析する。取り上げるのは、物語の長さ、ジャンル、材源としての位置づけのバラエティを考えて、以下の三作品の予定である。短編ながら『終わりよければすべてよし』の主たる材源の一つである「ナルボンヌのジレット」、長編でアーサー・ブルックの『ロミウスとジュリエットの悲話』に次ぐ第二の材源としてブルック作品との比較も欠かせない「ロミオとジュリエッタ」、そして、長編でウェブスター劇の主たる材源の「モルフィ公爵夫人」である。

‘The Moor’ から ‘Othello’ へ ——Cinthio の作品と Othello の比較を中心として——

鹿児島大学准教授 丹羽佐紀

ジラルディ・チンティオ (Giraldi Cinthio, 1504-73) の『百物語』(*Gli Hecatommithi*, 1566?) 第三巻第七話で ‘the Moor’ とされた主人公は、シェイクスピアの作品では ‘Othello’ という人物になる。それと同時に、Othello は単に抽象化されたムーア人というだけでなく、より多面的な様相を帯びた人物として観客の前に立ち現れる。

では、シェイクスピア劇に登場する Othello とは、当時の観客にどのように映る人物だったのであろうか。近年、特に 1571 年のレパントの海戦がイングランドにもたらした意味作用に着目しながら、キリスト教国対イスラム勢力という二項対立の構図にスペインを加えた地政学的視点から、この作品を分析しようとする新たな試みがなされている。しかし、これには、スペイン、ローマ教皇、ヴェネチア率いるカトリック連合艦隊がトルコ艦隊を破った歴史的出来事を、プロテスタント国であるイングランドがどのように受け止めたかという視点を更に加えねばなるまい。

本発表では、カトリック、イスラム、そしてプロテスタントという当時のヨーロッパをめぐる宗教勢力の変遷の視点から Othello という人物を捉え直す。それによって、チンティオの作品における ‘the Moor’ が、シェイクスピア劇においていかに様々な歴史的状況を具現化する人物へと発展したのか考えてみたい。

王政復古期における『リチャード三世』の改作 —— 英国歴史劇の変容 ——

鹿児島大学准教授 大 和 高 行

王政復古期には、シェイクスピア劇の多くが時代に合うように「改良」されて上演され、好評を博した。シェイクスピアのテキストを台無しにしたとして専ら18世紀中葉以降に公然と批判されるネイハム・テイトの『リア王一代記』(1681)でさえ、その「改良」は、王政復古期の観客に好意的に受け入れられた。

王政復古期の上演レパートリーに定着化したシェイクスピア劇の改作の一つに、コリー・シバー(Colley Cibber, 1671-1757)の『リチャード三世』(*The Tragical History of King Richard III*, 1700)がある。このテキストではシェイクスピアの『リチャード三世』との異同を示すために、イタリック体、引用符、ローマン体の三つが使い分けられている。シバーはどこをどのように変えることによって、当時の観客の嗜好に合うような「改良」を試みたのであろうか。また、シバー流の変更は、英国歴史劇というジャンルをどのように変容させたのであろうか。これらの点を明らかにするため、本発表では、18世紀初頭の劇場・職業的女優・歴史書等がシバーの改作テキストに及ぼした影響について考察する。更には、時間があれば、英国歴史劇における新たな歴史観の出現という観点から、ニコラス・ロウ(Nicholas Rowe, 1674-1718)の『ジェイン・ショアの悲劇』(*The Tragedy of Jane Shore*, 1714)との比較も行いたい。

“Adapted to the Stage by Colley Cibber; Revised by J. P. Kemble”

鹿児島国際大学教授 小 林 潤 司

J. P. ケンブルの芸風がどのようなものであったかを知るために、観客としてその舞台を見た人物(たとえばリー・ハント)による劇評を読み、その評言をもとに推測を試みたとしよう。約一世代の年齢差がある若きロマン派の文士の目に、ケンブルの演技は、とにかく悠長で、意味もなく重々しい、仰々しい茶番のように映ったようだ。しかし、ケンブル自身は、もちろん茶番を演じているつもりではなかったし、彼を「シェイクスピアの司祭長」、「国民詩人の公式スポークスマン」と持ち上げる声さえ、当時はあったのである。

新しい世代の感性には、どれほど理解しがたいものであったとしても、ケンブル自身やその支持者たちにとって、その上演スタイルは、シェイクスピア劇の上演として妥当適正なものであり、「歴史的に正確」であるさえ評価されていた。後世の人間の目から見ると、原作からの著しい逸脱、それどころか原作者への冒涇のようにさえ見える上演様式も、当人たちにとっては、真正なるシェイクスピアへと接近するためのまじめな試みだった。

当時の劇場では、たとえば『リチャード三世』といえば、シェイクスピアの原作ではなくコリー・シバーによる改作劇の上演が一般的であった。ケンブルは上演用台本を積極的に出版した人だが、その『リチャード三世』も、もちろんシバー版の改訂版である。この台本にケンブル自身が書き込みを施したプロンプト・ブック、そしてケンブルが著したシェイクスピア論 *Macbeth and King Richard the Third: An Essay* (London, 1817) を材料にして、ケンブルがめざした「真正なるシェイクスピア」とは何であったのかを考察してみたい。

“When shall I hear all through?” —— 『シンベリン』の終わり方を巡って ——

鹿児島国際大学准教授 山 下 孝 子

シェイクスピアの後期作品『シンベリン』では、親に引き裂かれた結婚、不貞の濡れ衣がもたらす

殺意、薬による仮死、死の誤認、女主人公の男装、戦乱、生き別れの家族の再会、等々のシェイクスピアではお馴染みの波乱の要素が雑多に詰め込まれている。その結果、起こりえないような幸運がもたらされる大団円で観客が手に入れるのは、局面の思いがけない急転と真相の認識による劇的なクライマックスであるとは言い難い。登場人物たちが次々にもたらす暴露の分担によって、真相の認識行為が細断され、引き伸ばされ、波が寄せては返すように繰り返される形を取っているのである。

『シンベリン』は、ほかのいくつかのシェイクスピア作品と同様に、その後、翻案の歴史をたどり、弛緩しがちな終幕の台詞や場面が削除されることがしばしばであった。その流れはバーナード・ショーによる終幕の改作に見られるように20世紀まで続いているのであるが、本発表では、特にショーが終幕を書き直した意図を再確認しながら、その時代時代になされたそれぞれの『シンベリン』の試みが掬いきれなかったかもしれないオリジナル『シンベリン』の何かがあるとすれば、それはどのようなものであるのか考えてみたい。

第2部門 (32号教室)

アメリカ文学

テネシー・ウィリアムズと身体

司会・講師	熊本県立大学准教授	坂井	隆
講師	熊本大学准教授	永尾	悟
講師	関西学院大学教授	新関	芳生
講師	東京大学教授	内野	儀

「なぜ、これほどまでに役者が裸体をさらす必要があるのか。」個人的な経験を述べて恐縮なのだが、これは、Tennessee Williams 生誕100年目にあたる2011年3月に、私(坂井)がニューヨークで彼の、とある2つの作品を観劇したときに抱いた率直な感想である。ひとつの作品(The Wooster Groupによる *Vieux Carré* の上演)では、主人公の男優が、終始、半裸状態で、時にはパンツ一枚だけをはいて、演技するし、また、もうひとつの作品(Laura Pels 劇場での *The Milk Train Doesn't Stop Here Anymore* の上演)においては、男性主人公を演じる役者が、全裸になり、性器までも観客にさらす場面が挿入される。両作品とも、ストーリーの展開上、裸体は別段、必要ではないし、Williams もト書きでそれを強く要求している訳でもない。それでは、何が——Williams の作品に秘められた何が——俳優の生身の身体をさらす演出を要求するのであろうか。ここで、Williams が創造した登場人物の身体表象という問題に眼を向けてみたい。というのは、20世紀アメリカ演劇の中で、彼ほど登場人物の身体造型にこだわった劇作家は数少ないように思えるからだ。*The Glass Menagerie* の Laura や短篇小説“*One Arm*”の Oliver Winemiller の障害をもつ身体、*Cat on a Hot Tin Roof* や *The Rose Tattoo* のヒロインたちの卑猥とも思われる性的身体、そして、*A Streetcar Named Desire* において Blanche の視線だけでなく、男性同性愛者の観客の眼差しにも供される Stanley のマスクュリンな身体など、代表的な登場人物だけを挙げて、枚挙にいとまが無い。さらに身体を、知性や理性と対立する身体的欲望と捉えなおすことが可能であるなら、それは、Williams の全ての作品に通底するテーマであろうし、同時に彼が同性愛者として対峙する必要があった性／生の問題でもあったと言える。

本シンポジウムでは、Williams、または彼の作品が提起する身体の問題を、様々な角度から検証することによって、彼にとって身体とは何であったのかを考えてみたい。Williams 生誕100年目にあたる節目の年に、身体から見える、新たな Williams 像を提示できれば幸いである。(文責 坂井)

テネシー・ウィリアムズの南部と身体

熊本大学准教授 永尾 悟

Tennessee Williams は、「私の全作品に共通する唯一の主要なテーマは、繊細で不服従な個人に対する社会の破壊的影響だ」と言うが、彼の多くの作品の舞台となっているアメリカ南部は、このテーマを具現化する上で重要な役割を果たしている。Williams が描く南部は、彼の生まれ故郷ミシシッピ・デルタの肥沃で神秘的な土地に根づく野性的なエネルギーの源泉であり、失われた過去へのロマンティックなノスタルジアとしてイメージ化されると同時に、「繊細で不服従な個人」を抑圧し、排除しようとする社会的現実を映し出す空間である。そして、幻想と現実が交差する南部を舞台にした抑圧される個人の苦悩は、彼らの身体を媒介として露骨でグロテスクに表象されている。

本発表では、Williams が南部のことを「最も直接的に書いた」と言う *Orpheus Descending* (1957) に焦点を当てながら、南部というコンテキストから身体表象の問題を考察する。この作品では、トゥー・リヴァー郡にある小さな町を舞台に、保守的な住民の閉鎖的な関係の中で、家族の問題や過去のトラウマなどに苦しむ人物たちの物語が展開される。この町を訪れた放浪のギター弾き Val Xavier は、人間が「自分の体を包む皮膚の中に閉じ込められているんだ」と語るが、Orpheus の登場人物は、自己を肉体的かつ精神的に解放する手段と対象を強烈に求めている。そして、抑圧された個人の感情や衝動と歪んだ人間関係は、Williams の他の多くの作品と同様に、身体にまつわる表現や表象を通して描き出される。本発表では、Orpheus の作品分析を中心としつつ、Williams 文学における身体表象と南部の文化的背景との関連性を探ることを最終的な目的とした。

Poet と Playwright の狭間で —— テネシー・ウィリアムズのテキストにおける身体と言語 ——

関西学院大学教授 新関 芳生

Broadway における *The Glass Menagerie* の大成功から3年ほど後に出版された、Williams の短編小説 “The Poet” は、蒸留酒の記述から始まる。いかなる “organic matter” からでも酒を作り出すことができるほど蒸留に熟達した詩人の酒は、一口これを含めば自らの肉体に活力を蘇らせ、世界の見え方を一変させる。仮にこの蒸留酒を言語と置き換えてみれば、この描写はそのまま詩的言語が生み出される際のメタファーとなるだろう。詩人は自らの生の体験を蒸留して言葉として滴下させ、芳醇な詩を生み出すのである。この短編の最後の場面では、海の波にすっかり洗われて残った詩人の白骨を囲み、以前その詩に聞き入っていたかつての少年少女たちが、詩人が残した蒸留酒を口にする。ここでは詩人の肉体が消え去った後に残る骨と、詩人の蒸留酒とが併置されており、肉体の変質を経て残る骨と、蒸留酒のメタファーで表現される（詩的）言語とが重ね合わされるのである。

Williams 自身が生涯にわたって崇拜していた夭折の詩人 Hart Crane に捧げたこの短編は、この劇作家が身体と言語の関わり合いについてもち続けていた姿勢の寓意として読むことができるのではないだろうか。Williams にとって言語とは、身体から蒸留される酒であり、あるいは肉の腐敗の果ての骨として現れてくるものなのだ。いずれにしてもそこには、身体への過剰なまでの自意識と、身体の否定という、相反する分裂した精神のリズムがある。

“The Poet” を出発点としたこのような仮定を、Williams の劇作品に向けてみるならば、彼のテキストにひんぱんに登場する、身体への加虐、アルコールやドラッグによる酩酊、身体の拘禁、あるいは同性愛の身体への共感と嫌悪の並列などを、言語を絞り取るための、一種のメタ的なモチーフとして読み直すことはできないだろうか。本発表では、このような視点から、Williams の演劇作品のみならず、彼の小説や可能であれば詩作も対象とし、躁鬱とアルコール、ドラッグによって身体を痛めつけながら創作を続けたこのゲイの劇作家の伝記的な事実も関連させ、身体と言語の関係性を明らか

にしたい。最終的には、常に役者の肉体とそのパフォーマンスを意識せざるを得ない劇作という身体的なテキストと、このような身体性を極限まで消し去り純粋な声になることができる詩作との間で、Williams自身が生涯揺れ続け、分裂していたという結論を導きだすことができればと考えている。

ドラマと身体 —— テネシー・ウィリアムズのテキストの身体 ——

東京大学教授 内野 儀

近年の北米アカデミズムにおけるドラマ概念再訪という事態には、このところ30年以上にわたって続いている「〈文学＝テキスト〉か〈上演＝パフォーマンス〉」かという、相互排除的のカテゴリー対立として可視化されてきた演劇研究の膠着状態に対する苛立ちと異議申し立てという様相が強く見られる。Shannon Jackson、Martin Puchner、あるいはW. B. Worthenといった論客たちが、旧来的な〈文学＝戯曲研究〉と新興のパフォーマンス研究を歴史的かつ理論的に横断してみせることで、ある種の啓示的体験をわたしたちに与えてくれるとするなら、それはなにより、文学研究への回帰でもなければパフォーマンス研究への進駐でもない、演劇研究の進むべき第三の可能性がその批評的視座に胚胎されているとみなせるからである。もちろん、その可能性は理論的ないしは原理的可能性にすぎず、具体的な〈作品〉——それが出版された文字テキストを指すのか、個々の上演を指すのかはさておき——の新たな理解には繋がらないという批判が、少なくとも現時点では可能である。

この発表ではまず、ここ10年あまりの間に急激に展開した上記の新しいドラマ理論の論点を整理し、〈身体〉という場所(site)、あるいはトロープ(trope)についての、その理論的言説における思考を検証することから始めたい。その際、たとえばWorthenによる、「アーカイヴかレポーターか」という問いに集約されるような、先に触れた二元論を乗り越える可能性を論じた“Antigone’s Bones” (TDR: 199, 2008)などが主たる参照先となる。

そこから、今回のシンポジウムのテーマであるテネシー・ウィリアムズについて、そのキャノニカルな出版テキストと具体的な上演へと、議論を差し戻すことにしたい。たとえば、*A Streetcar Named Desire* (1947)の出版テキストと作者自身がその制作に深く関わった映画版(1951)の映像テキスト、さらに、この戯曲テキストの〈演出家の演劇〉的上演の典型例のひとつと考えられる舞台作品*Endstation Amerika*(『終着駅アメリカ』、Frank Castrof演出、2000)などを具体的に参照しつつ、それぞれにおける〈身体〉とは何か、あるいは、何だと言えるのか、について考えてみたい。

第3部門(42号教室)

英語学

結果構文研究の現状と展望

司会・講師	九州大学准教授	江口 巧
講師	中村学園大学准教授	木原 美樹子
講師	久留米大学准教授	安藤 裕介
講師	中村学園大学教授	山根 一文

1990年代に急速な高まりを見せた結果構文研究は、多様な方面からのアプローチがなされ、「事象構造」、「クオリア構造」、「形容詞のスケール構造」といった方面からの知見を取り入れ、また類型論的視点からの研究もなされ、ここ20年余りの間に大きく進展してきた。

例えば影山(2007)は、認知語用論的要因が絡み定式化が困難とされた結果構文の使役事象と結

果事象の組み合わせに関し、動詞の語彙概念構造およびクオリア構造の目的役割の概念を用いて、様々なタイプの結果構文の容認性・生産性を体系的に説明し、この方面の問題にある程度決着をつけた感がある。

一方、2000年代にはいって急速な発展を遂げたのが、結果構文のアスペクトに関する研究である。Vanden Wyngaerd (2001) の論考を皮切りに、それまで結果状態を表すとされていた形容詞結果述語が、結果状態に至るまでの経路を表しうるという見解が広まり、結果述語として表れうる形容詞をそのスケール構造によって限定した Vanden Wyngaerd (2001), Wechsler (2005) らの論考が発表された。また、結果構文が全体としてもつべき telicity (完結性) を達成するために、形容詞結果述語のスケール構造に対する制約が、結果構文のタイプによって異なるとした小野 (2007) の仮説も興味深い。

このシンポジウムでは、こうした結果構文研究の昨今の動向を踏まえ、これまでに提示された見解が妥当なものであるか検討し、また、未だ解決されたとはいえない問題に対し、新たな視点で解決の糸口を探っていききたい。

参考文献：

- 影山太郎 (2007) 「英語結果述語の意味分類と統語構造」, 『結果構文研究の新視点』小野尚之編, ひつじ書房。
 小野尚之 (2007) 「結果述語のスケール構造と事象タイプ」, 『結果構文研究の新視点』小野尚之編, ひつじ書房。
 Vanden Wyngaerd, G. (2001) “Measuring Events,” *Language* 77.
 Wechsler, S. (2005) “Resultatives Under the ‘Event-Argument Homomorphism’ Model of Telicity,” *The Syntax of Aspect*, ed. by N. Erteschik-Shir and T. Rapoport, OUP.

結果構文の修辭と容認性

中村学園大学准教授 木原美樹子

結果構文の容認性を巡り、動詞の意味、結果述語の選択、動詞と結果述語の組み合わせ等に関して、様々な制約の存在が提案されてきた。どの制約もある程度までは、結果構文の容認性を説明できるが、制約を覆す例が存在している。先行研究における意味的制約に当てはまらないのに容認可能と考えられる結果構文には、共通した特徴があると思われる。それは極めて修辭的な特徴を持っているということである。結果構文に関して、修辭的な動機は文を成立させるのに重要な要素であると思われる。通常、言語現象では典型的なものを中心として、容認性に揺れがあるような周縁的なものが存在する。典型的なものから離れれば離れるほど容認性は低くなる。しかし、一方で典型的な例とはかけ離れた文が容認される。本発表では結果構文において、制約の反例となるような文が、どのようなメカニズムによって容認可能となるのかを考察する。

結果構文における「に」と to の意味的平行性

久留米大学准教授 安藤裕介

英語の結果構文において生起する to は着点を含む経路を表し、一方、日本語の結果構文において生起する、英語の to に対応する「に」においては着点のみを表すというのが、昨今の結果構文研究の趨勢である。しかし、『いすの上に立つ』に生じる「に」の例などからわかるように、日本語の「に」が純粋に着点のみを表すのかについては議論の余地があるように思われる。本発表では、日本語の「に」が着点だけでなく、経路を表すかどうかについて考察を進め、英語の結果構文との平行性について論じていく。

英語の結果構文における結果述語の認可条件

中村学園大学教授 山 根 一 文

英語の結果構文における結果述語は、①AP、②PP、③NPの3つのタイプに分けられる。それぞれ、He shot the tiger *dead*. (AP)、He shot the tiger *to death*. (PP)、He painted the fence *a vivid shade of blue*. (NP)を例に挙げることができる。しかしながら、これら3つのタイプは無条件で認可されるわけではない。ここでは、結果述語の認可条件を概観し、とりわけ、The maid scrubbed the pot *shiny/*shined*. 及び The joggers ran themselves *sweaty/*sweating*. にみられるように、なぜ過去分詞、現在分詞から派生したAPは認可されないかを考えてみたい。

結果構文の aspekto を考える

九州大学准教授 江 口 巧

2000年代に入り、結果構文研究は結果構文の aspekto、特に結果述語のスケール構造の問題に大きくシフトしてきている。結果構文は全体として telicity(完結性)をもつという点は学者間で共通認識となっているが、近年では、形容詞の中にもスケール構造をもつものが存在するとされ、Wechsler (2005)は、形容詞結果述語は、*dead*のような非段階的形容詞か、*flat*, *dry*のような最大極点をもつ閉鎖スケールの動詞に限定されると述べている。

また、小野(2007)は、結果構文が全体として完結性を達成するため動詞と結果述語が果たす連携に関して興味深い仮説を提示し、状態変化動詞をもつ本来の結果構文では、動詞そのものが完結的であるため、形容詞結果述語のスケール構造には制限がないのに対し、派生的結果構文では、完結性は結果述語が担い、形容詞は閉鎖スケールに限定されると述べている。このことを裏づける経験的事実として、小野(2011)では、以下のように、本来の結果構文(1)と派生的結果構文(2)では、許容される前置詞句にも違いがあることが指摘されている。

- (1) John broke the stick {in/into} pieces.
- (2) John pounded the metal {*in/to/into} pieces.

さらに興味深いのは、Vanden Wyngaerd(2001)が指摘するように、本来 *very* と共起する開放スケールの形容詞が(派生的)結果構文に現れた場合、もはや *very* とではなく *completely* などと共起する、つまり閉鎖スケールのタイプにシフトしているという点である。

- (3) Charley laughed himself {completely/*very} silly.
- (4) Tim danced himself {completely/*very} tired.

この事実は、*make-causative* などと異なる結果構文の本質を示唆する手がかりを与えていると思われる、本発表では、結果構文ではなぜこのようなことが起こるのかそのあたりの理由を探ってみたい。また、あわせて、結果述語の有界性を論じる際に、一般的にもちだされる終点(end-point)という概念の有効性についても検討してみたい。

参考文献：

小野尚之(2011)「英語結果構文の固有性と類型的特性」*JELS* 28.
その他の文献については、全体要旨の参考文献を参照

〈第2日〉10月30日(日)

研究発表

第1室 (11号教室)

司会 九州大学教授 徳見道夫

2. マクベスと魔女たちの関係性 —— サバトを通じて ——

西南学院大学大学院博士後期課程 雨森未来

本研究発表では、『マクベス』の洞窟の場(4幕1場)において繰り広げられるサバト(黒ミサ、魔女の宴会)を通じて、運命を操る魔女たちとマクベスとの関係性を考察する。『マクベス』における魔女たちはルネサンス期の demonology が主張する人間を陥れることを本分とする反キリスト的暗黒世界からの使者であり、マクベスを彼らの邪悪な意図に惑わされる墮落者として捉えることができる。

武将として優れた力量と申し分のない血筋、勇敢な気質を持つと讃えられたマクベスは怪しい魔女たちの予言と助言に惑わされ、君主であるダンカン王の殺害を遂行して王座を篡奪し、恐怖政治によってスコットランドの統治を維持しようとする邪道を歩む。彼の凋落の道のりは、ライバルであるバンクォーの暗殺、自分に歯向かうマクダフの妻及び子どもたちの虐殺によって血ぬられた所業に満ち、その代償に暴君として討伐の的となり、復讐を晴らすべくマクダフによって悪魔として首を落とされる。流血、残忍、暴君という反英雄の要素をもちながら、マクベス批評は彼の人格、性格の変容を重点的に価値あるものとし、英雄からの転落のプロセスに悪党英雄として返り咲きする機会を与えている。マクベスの悲劇は、そのきっかけを与えた超自然的な出来事である非人間的な魔女たちとの出会い、そして予言の存在なしには始まらない。マクベス個人の英雄化に伴い、魔女の影響力を過小評価し、魔女たちとの遭遇以前からマクベスが危険な野心を秘めていたと考えることは妥当ではない。

魔女の存在を不可解のままにせず、ヨーロッパ大陸で猛威を振るう魔女狩りの勢力を支える学問 demonology の魔女観、その危険な思想の支持者であり媒介者でもあった国王ジェームズ一世の著書 *Demonologie* をイングランドにおける魔女を取り囲む歴史背景を反映する資料の一つとして踏まえながら、魔女たちとマクベスの関係を検証したい。

3. ゼロからの脱出 —— 変化する女性性の描写 ——

福岡女子大学大学院博士後期課程 國崎 倫

エリザベス朝社会通念として、長子相続制、家父長制が根付き、女性には寡黙、従順、貞節という三大美德が求められた。女性は男性の所有物とみなされ、未婚であれば父親のために、既婚であれば夫のために「honour」を守るよう義務付けられた。これは「家」や「血」を存続させるためである。女性性はゼロに象徴される。*The Merchant of Venice* (1596-7) 最終場において指輪の管理は女性性の掌握を意味する。*Hamlet* (1600-1) にて、王家の血をひくガートルードは単独で女王にならず、必ず夫に帰属する。女性性は男性性の価値を倍増することに存在意義を持つとされた。*King Lear* (1605) におけるコーディリアの台詞「nothing」も全く無関係ではない。父権制の徹底を示す例として、*Pericles* (1607-8) では、父親との近親相姦にある匿名の王女には主体的な台詞が無く、落雷で親子共に死ぬ。*The Tempest* (1611) では、ナポリ公アロンゾの娘クラリベルが Tunis へと嫁ぎ王妃となるが、これ

は黒人社会への追放に等しい。両者は父権制による犠牲者の象徴的脇役である。

一方で、社会通念を賢く利用し、一時的に束縛から解放される女性もいる。『十二夜』ヴァイオラと『ヴェニス商人』ポーシャは、異性装によって男性性を獲得し、恋を成就させる。しかし、女性であることを隠さずに男性同様に振舞えば、マクベス夫人のように理想像からの逸脱を理由に死をもって罰せられ、現実世界の観客も含める社会全般への教訓となる。

シェイクスピア作品に登場する女性の多くが脇役であり、彼女たちの個性は周辺の男性との関係によって描き出される傾向にある。しかし、ジェイムズ朝以降、それまでの甘美な社会通念は崩壊し、狡猾な女策士や悪女だけでなく、貞女と思われた女性までもが個人的倫理観、宗教観、人生観を確立し、富や名誉、主体性や自由を獲得しようと闘う姿勢を見せる。彼女たちは人間の醜い部分も露骨に表現するため、観客にとって現実的な存在となる。Thomas Heywood, *A Woman Killed with Kindness* (1607)、John Ford, *'Tis Pity She's a Whore* (1633)、Thomas Middleton, *Women Beware Women* (1657) など、作品名においても女性が目立つのは大きな変化だ。両時代の作品が与える印象の違いが生じる理由を社会背景と共に考察し、女性性描写にみとめられる変化を追う。

司会 北九州大学教授 田部井 世志子

4. 脅かす子ども——『フランケンシュタイン』における擬似的親子と植民地主義——

九州大学大学院博士後期課程 浅田 えり佳

Mary Shelleyの *Frankenstein; or, The Modern Prometheus* (1818) の主人公 Victor の妻となる Elizabeth は、彼の母によって引き取られ養育されていた女性である。Victor の母は猩紅熱にかかった Elizabeth を看病したために病に感染して死亡する。これは真の親子ではない擬似的な親子の子が原因で親が死亡する一つの例といえるが、Victor の弟 William 殺害について濡れ衣で死刑になる Justine も、自分を実の親のように慕っていた William が原因で死に至っている。これもまた擬似的な親子の子を原因とした親の死亡の一例といえる。そして Victor と怪物も、Victor は怪物を作った「親」であるとはいえ血はつながっておらず、擬似的な親子の子が親を苦しめて死へ追いやっている例ととらえられる。

一方、宗主国と植民地の関係も、民族的つながりはないものの、植民地は宗主国によって新たに「生み」出されたシステムと考えられる。死体置き場にあった死体から怪物が創造されたように、植民地は現地にあった材料で宗主国によって作られたものなのである。

本発表では、作品が描く擬似的親子における子によって破滅に追いやられる親というパターンを、植民地による潜在的な反逆の可能性に常にさらされつつある宗主国のありようと重ねることによって、作品の新たな解釈を試みるものである。Victor の家族では Victor を含めほとんどの者が死亡してしまうが、傭兵となった弟 Earnest だけが死を免れている。スイスはヨーロッパで例外的に植民地を持たない国で、Earnest のような傭兵を多数輸出しても、自国の軍隊で植民地を支配することはなかった。そうした Earnest を例外として Victor の家族が次々死亡することも、怪物による Victor 一家への復讐が、植民地の宗主国への潜在的な反逆を想起させるものの一つである。また、植民地主義に積極的に加担しようとする Clerval も怪物によって殺害される。そのような作品の中の事例に着目しながら、*Frankenstein; or, The Modern Prometheus* における擬似的親子関係と植民地・宗主国の関係の象徴的な関係を考察していきたい。

5. トールキンのカトリシズム

九州大学大学院修士課程 島 居 佳 江

カトリック作家として知られるトールキンであるが、近年の研究ではそれを疑問視する論調もある。ダイアン・スピード(2008)は、(1) あからさまなキリスト教の関連を意図的に否定した物語の中にいかにキリスト教の関連を認めるのか？(2) どのような種類のキリスト教の関連が見られるのか？という二つの問題を提起している。また、カーリー(2008)の論文によって、異教と呼ばれる英国のキリスト教以前の土着の宗教をはじめ、他の宗教に対してもトールキンはあまりこだわりがなかったのではないか、という指摘もなされている。

本発表ではトールキン家公認のハンフリー・カーペンターによる伝記を時代考証とともに丹念に掘り下げ、トールキンのカトリシズムへの傾倒に光を当てる。ジョン・ヘンリー・ニューマンは1833年から僚友らとともに、英国国教会の改革運動(オックスフォード運動)を起こした。これは基本的には福音主義的な英国のキリスト教会のいきすぎた世俗化、自由化に対して、教会の根柢を使徒の継承に求め、聖体拝領をはじめ、儀式・典礼を重んずる主張である。ニューマンは徐々に国教会への疑問を深め、オックスフォードを去り、1845年、カトリックに改宗した。このニューマンの改宗は国教会に深刻な打撃を与えた。この一連のカトリックの攻勢は激しい反カトリックの風潮を引き起こす。このような時代を背景にトールキンの母、メイベルは夫亡き後、1900年に国教会からカトリックに改宗した。親族の経済的援助が打ち切られる等、困難の中にあつて、メイベルはあらゆる反対を押し切ってトールキンをカトリックの教えにそって教育しはじめる。4年後にメイベルが34歳の若さで病没した後、トールキンは「わが愛する母は殉教者そのものであった。・・・私達の信仰をゆるぎないものにするために、艱難辛苦の末に、生命を失うような一人の母を、神は与えてくれた。」と記している。

先に挙げたように、トールキンの作品にカトリシズムの影響を否定する論も多いが、ウッド(2006)が述べるように「『指輪物語』の宗教的意義は、そのプロットと登場人物たち、様々なイメージと格調、さらに風景と視点から生じるのであり、何か押し付けがましい道徳論や説教からではない。」「宗教的要素は物語とシンボリズムに浸透している(トールキン)」ということ、宗教寓話『ニグルの木の葉』、『シルマリルリオン』、そして代表作である『指輪物語』を中心に取り上げ、例証していく。

第 2 室 (12号教室)

司会 九州大学准教授 鵜 飼 信 光

2. オースティンの『説得』における「ロマン派」詩人的部分

北九州市立大学大学院修士課程 蓮 香 ひとみ

これまでオースティンについては、「情熱の欠如」、「冷淡」、「現実的」という言葉が使われるように、総じて彼女は「アンチロマンティック」な作家だという評価がなされてきた。

『説得』では、婚約者と死別して半年も満たぬ間にルイーザ・マスグローブと恋に落ち、婚約したベンウィックについては、心が弱く、ロマン派の詩に耽溺する感傷的で移ろいやすい人間として、ロマン派詩人のネガティブな影響のみを指摘する批評家がほとんどであった。しかし、『説得』では前半期の作品とは異なり、ロマン派詩人たちに対するアイロニックな態度だけでない、影響、共感を随所で見せている。

本発表では、ベンウィックの心境の変化を綿密にたどることにより、婚約者との死別という大き

な悲劇を体験した青年が悲嘆の極から、自己を取り戻していく過程でのロマン派詩人との関わり方を取り上げる。

また、ベンウィックが喪失から再生していくプロセスを心理学的な視点で考察しながら、アンとベンウィックとの出会いを、彼が世の中に戻る手助けの一端を担うエピソードとして肯定的にとらえる。これらに基づいて、ベンウィックをロマン派詩人の愛読者として設定したオースティンの意図を検証し、そのキャラクターの意味と役割を再評価したい。

3. 「遊び」の国のアリス ——ルイス・キャロルの現実世界——

北九州市立大学大学院修士課程 堀 秀 暢

本発表の目的は、ルイス・キャロルの著書『不思議の国のアリス』における事象を、ロジェ・カイヨワの提唱する「遊び」という観点から論証することである。この物語における非日常性や幻想性をノンセンスとして捉え、そこに含まれる様々の「遊び」の要素を考察していく。「遊び」は四つの種類に分類され、競争の性質を持つ「アゴン」、運の性質を持つ「アレア」、模擬の性質を持つ「ミミクリ」、眩暈の性質を持つ「イリンクス」がある。さらに、「遊び」には規則の存在が絶対的に必要であり、規則を守ろうとする意志が「遊び」を成立させている。そして、「遊び」はその性質上、楽しむものであるために、強制されるのではなく、自分の意志によって始め、そして終わらせるという要素も重要である。

この物語の特徴として存在しているのが、日常における規則の破壊である。この破壊は単なる規則の無視ではなく、日常において使われることのない新しい規則であるために、そこに非日常性や幻想性が発生している。例えば、先に挙げた「イリンクス」の性質に相当するものとして、主人公アリスの身体に生じる異常がある。この異常は、彼女の五体が伸縮するという形で生じる。当然のように日常において身体が急激に伸縮するという現象は発生しない。このような身体の伸縮という現象を通じて、人間の感覚にある種の「ずれ」である眩暈という異常を生じさせる。また、感覚の異常それ自体は日常生活においても発生している。例えば、身近なものとしては飲酒が挙げられる。アルコールが脳に及ぼす影響により、人は非日常を得る。しかし、アルコールによる非日常の獲得には、依存などの精神的、肉体的危険が伴う。この危険は、「遊び」における要素の一つである、開始と終了の自己決定権を剥奪するものであり、単純に感覚を異常にさすだけでは「遊び」であることにはならない。

このような感覚異常などの「遊び」と、この物語が書かれたヴィクトリア朝の時代背景を通じて、人間という生命体や、それをとりまく自然や宇宙といった環境、そしてそこに存在する規則や法則といったキャロルの世界を捉えてみたい。

司会 水産大学校准教授 高 本 孝 子

4. *Atonement* における救いについての考察 ——カルヴァン主義の立場から見た贖罪——

北九州市立大学大学院博士後期課程 三 隅 初 美

Ian McEwan の *Atonement* について、そのタイトルが意味するものを検証することは、重要な課題である。atoneement という言葉は、償い、贖い、キリストが十字架にかかり人類の罪を贖ったことを意味する。語源は、16世紀初頭、神と人類の関係性において、和合や調和を意味するところから派生している。聖職者が贖罪の権能を持つローマ・カトリックの立場でなく、キリストの十字架による贖いを信じることによって罪が赦されるとするプロテスタントの立場から、*Atonement* を再検討する必

要がある。

さらに、プロテスタントの立場でもカルヴァン主義とアルミニウス主義をはっきり区別して考えることも必要である。絶対的な神の主権を主張するカルヴァン主義の予定説に基づいて救いに至るのが、Briony、Robbie、Ceciliaではないか。

一方、結婚式での牧師祈祷の描写の含意を押し量るとき、アガペーとエロスという二つの道が浮き彫りになってくる。アガペーは、人間に対する神の普遍的な愛であり、人間の没我的な隣人愛、兄弟愛、キリスト教的愛を表す。エロスは、性愛や肉体の愛、自己中心的な愛を表す。神の愛による救いに至るには、アガペーの道をたどるか、結婚によるエロスの道をたどるかしかない。ここで、作中人物、Briony、Robbie、Cecilia、Lola、Paulについて、このアガペーとエロスの道を当てはめて考えてみる。Briony、Robbie、Ceciliaは、アガペーを体現し、神の化身となるものに変化を遂げていき、救いに導かれているのではないか。エロスの道をたどるのは、Lola、Paulだろう。今回、Robbie、Cecilia、Brionyがどのようにアガペーのレベルに到達し、救いに導かれていったかについて、分析していき、そのことがカルヴァン主義の教理とどのように結びつか検証していきたい。

第 3 室 (14号教室)

司会 佐賀大学准教授 名本達也

2. 19世紀後半アメリカのジャンヌ・ダルク

— *The Bostonians* における女性の声・精神・身体 —

九州ルーテル学院大学専任講師 砂川典子

Henry James の中期小説の代表作である *The Bostonians* (1886) は、女性演説家 Verena Tarrant をめぐる女権拡張論者 Olive Chancellor と南部出身の保守主義者 Basil Ransom の激しい争いを描いている。

ランサムによるヴェレーナの奪取は、南部的騎士道精神の表れであり、彼女が家庭の暖かさといった美德を失うことを危惧してのことであると同時に、アメリカの女性化を憂えてのことであると解釈できる。こうしたアメリカの女性化に対する怒りは、当時のガイノフォビア、あるいはミソニジー的言説が反響しており、女性化するアメリカへの不安とそれを象徴している女性演説家ヴェレーナの抑圧は様々な視点から論じられてきた。しかしながら、ランサムの懲罰的でサディスティックな欲望に対して、オリーヴのヴェレーナに対する欲望はアンビヴァalentであり、ヴェレーナを怪しげな催眠療法師の父と俗悪な母親から救い出し、女権拡張運動のパートナーとしてコントロールしようという支配的欲望と同時に、特に作品後半顕著なように、ヴェレーナの愛を独占したいがための心理的従属が見られる。この欲望と支配、および従属については、その原因がオリーヴの同性愛的傾向、および性格的欠陥に帰着させられることが多く、ほとんど注意が向けられてこなかった。

本発表では、はじめに、19世紀後半アメリカにおける女性演説家という存在をスピリチュアリズムとの関係とともに考察し、その精神性と身体性を探る。そして、これまで先行研究ではほとんどふれられてこなかった、オリーヴが女権拡張運動に対する傾倒を宗教的情熱になぞらえる時に頻繁に使用する、殉教やジャンヌ・ダルクといったタムを分析する。さらに、この分析を通じて、「女性の絆」の聖性の追求と性的抑圧の関係を示し、オリーヴのヴェレーナに対する欲望と支配の構図を再検討したい。

司会 北九州大学教授 前田 譲治

3. 成り代わる視点 — *Dangling Man*における他者観—

九州大学大学院修士課程 幸山 智子

Dangling Man (『宙ぶらりんの男』) は1944年に出版された Saul Bellow の処女小説である。この作品は、召集令状を待つあいだ定職に就くこともできず、いわば自由を強いられて社会から孤立した男 Joseph の日記という形式をとっている。作品発表当時、この作品は戦時下の人々の異常心理を鋭く表現したものとしておおむね良好な評価を得たが、Bellow の作家としての地位を大きく変えるものにはならなかった。Bellow 自身、この作品とつづく第二作 *The Victim* (『犠牲者』) については後年あまり語りたがらなかつたと言われている。しかしながら、これらの初期の作品においても、その後の Bellow 文学の中核的テーマに発展するものの萌芽が見受けられるのも事実である。本発表においてはその一例として、Bellow の他者観を挙げたい。

作品中で、主人公 Joseph は過去の自分と現在の自分とを対比させながら状況を考察しており、その結果として分身とも言える存在が対話者として出現するにいたるのだが、従来の分身物語と決定的に異なっているのは彼が自ら他者に成り代わろう、他者を作り出そうとしている点であろう。例えば、*Dangling Man* が出版された一年後に発表された Truman Capote の短編 “Miriam” においても同様に分身と思われる存在が描かれているが、そこに描かれる分身(他者)が主体を脅かす存在として出現している一方で、*Dangling Man* においてはむしろ主体が自ら率先して分身を作り出しているように思われるためである。この作品に対する批判としては、日記体という形式に起因する限定された視点、観察が自己の内面にばかり向けられあくまで個人的なレベルにとどまっていることがしばしば挙げられてきたが、Joseph の他者に成り代わろうとする動きを詳細に検討すると、一見限定されたように思われる彼の視点が実は多彩なものであることがわかる。

Joseph が自ら自己を新旧という時間的な区切りによって分断しているように時間という概念が自己客体化を可能にしている要因のひとつであることは明らかであるが、ここではさらに言語、空間、そして身体レベルにおいても自己の他者化が起きていることを確認したい。特に、他者化の過程において空間が果たしている役割を論じ、他者に成り代わろうとする動きが Bellow の身体観と創作姿勢を反映したものであることを明らかにする。

司会 西南学院大学教授 宮本 敬子

4. 分解する物語 — *The Bluest Eye* における暴力の連鎖—

九州大学大学院修士課程 吉田 希依

Toni Morrison の第一作 *The Bluest Eye* (1970) は、強姦、近親相姦、小児愛といったタブーとされる性の問題に真っ向から挑み、多様なセクシュアリティを描いた作品として重要である。アメリカ黒人作家が、「黒人は性的な存在である」というステレオタイプに常につきまとわれている状況を考慮すると、処女作における Morrison の大胆な挑戦は、彼女の作家としての決意——社会的規範に束縛されず、セクシュアリティの可能性を探究する姿勢——を感じさせる。従来の研究では、本作品の中心にある Cholly の Pecola へのレイプという暴力としての性に注目しがちであり、Pauline の回想に明らかに示されるような性の肯定的側面、力を取り戻す回復の手段としての性行為についてはあまり詳しく取り上げられていない。

実際 *The Bluest Eye* においては性的な行動が暴力の連鎖に終わり、物語は崩壊する。例えば *Beloved*

で示されるような再生への予感を描かれぬまま結末を迎えるのだ。優しく愛そうとした、というレイピストの身勝手な言い分は、Cholly自身も白人の男たちに(象徴的な意味で)性的暴力をうけた被害者であることを考えると、複雑である。「自分たちの身体が意味を持ち始めた」途端、暴力的に行方を中断させられたトラウマを抱える彼は、愛する者に暴力的にしか触れる方法を持てなくなるのである。しかしながらこのような暴力の連鎖が中心的に描かれる一方で、上に述べたような Pauline の力を得る手段としての性行為や、好意的に描かれる3人の娼婦たちの存在など、暴力に対抗する術としてのセクシュアリティの可能性が、断片的にはあるが示されていることは注目に値する。

本発表では、The Bluest Eye の物語の中でまず、人種的劣等感を抱いている黒人たちの間で性的暴力が繰り返され、連鎖する仕組みをあぶり出し、そして自己肯定、受容が欠如しているために登場人物たちが回復へ向かえないことを明らかにする。彼らは自分たちの黒さを軽蔑し、自己の存在が分解する恐怖に苛まれている。身体の分解は Morrison 作品全体を通じての重要なテーマの一つである。そしてさらに、Morrison の他作品と比較しながら、回復への可能性を探りたい。

司会 福岡大学教授 大 島 由起子

5. 被爆者と「母国」アメリカ

九州大学大学院博士後期課程 永 川 とも子

1945年8月6日、広島市で爆死した人々の数は、14万人であると言われている。しかしこの歴史的な大事件に遭遇しながらも、21万人の人々が生き延びた。これらは有名な記録であるが、広島の被爆者のうち、数千人が実はアメリカ生まれの日系米国人であり、さらに彼らのうちで、大戦後、母国アメリカに「被爆者」という重荷を背負い帰国した者は数百人に及ぶという事実はあまり知られていない。いわば彼らは「母国」アメリカからも祖先の国日本からも忘れられた存在だったのである。

日系3世の米国人作家、ナオミ・ヒラハラは2004年から2011年までの間に、マス・アライという人物を主人公にした作品を4作発表している。マス・アライは正に、広島で被爆し、その記憶と共に米国へ帰化した「在米被爆者」の一人であり、ヒラハラ自身の父親がモデルになっているとされる。本発表では、彼の広島での記憶とアメリカの現実を横断的に描いたマス・アライ4部作の第1作目、*Summer of the Big Bachi* (2004) を取り上げる。

マス・アライは1947年にアメリカへ再び渡って以来、主に日系人コミュニティの中で生きてきた人物だ。彼の思想で興味深いのは、無神論者であるにも関わらず、「罰」を信じているという点である。彼は原爆投下の日、広島での自身のある行いへの報いをうけること、すなわち「罰があたること」を恐れ、被爆者としての自分を隠すようにして暮らしているため、被爆体験を同胞と共有することができない。また、大戦中はアメリカの日本人収容所で暮らしたわけでもなく、アメリカに忠誠を誓って戦線で戦ったわけでもなく、さらに日本に帰化することもしなかった彼は、日系人コミュニティの中でも位置の定まらない存在として描かれる。この点に、在米被爆者マス・アライの存在の複雑性があり、アメリカで被爆者として生きるという状況の深遠さが提示されている。

本発表では、まず、在米被爆者のアメリカ社会における位置づけを考慮したうえで、マス・アライの原爆の記憶とその再生の過程に注目する。その上で、彼が「母国」アメリカ社会の中で被爆の事実とどう向き合っているのかという点について、とりわけマス・アライと彼を取り巻く日系人コミュニティの構成員との関わりのうちに検証していきたい。

第 4 室 (21号教室)

司会 西南学院大学教授 藤 本 滋 之

1. QR in Phase Theory

九州大学大学院博士後期課程 下飯屋 翔

文中に生じた2つの数量詞(句)には、それらの表層語順からは予測されない作用域 (Inverse Scope: IS) 解釈を生じる可能性がある。

(1) Someone loves everyone. [∃>∀, ∀>∃] (Johnson 2000: 187)

この解釈の可能性には節境界とその定形性が関係するとされ、定形補部に一方の数量詞が含まれる(2a)ではIS解釈がないのに対し、(2b)の不定詞補部ではIS解釈が得られる。

(2) a. Someone believes that everyone is kind. [∃>∀, *∀>∃] (Johnson 2000: 192)

b. Someone wanted to visit everyone. [∃>∀, ∀>∃] (ibid.: 188)

しかし、非定形節の場合でも、(3a)のように知覚動詞の補部に生じる数量詞はIS解釈をとることができないが、(3b)のようにECM補部内に生じる数量詞にはそれが可能である(Hornstein, Martins, and Nunes 2006: 90)。更に、(4)の事実から、動名詞節内に生じる数量詞にもIS解釈が起こることが分かる。

(3) a. Someone saw everyone leave. [∃>∀, *∀>∃]

b. Someone expects everyone to leave. [∃>∀, ∀>∃]

(4) Someone recalls everyone being born. [∃>∀, ∀>∃] (Johnson 1988: 595)

May (1977)に代表される初期の研究では、LF部門での数量詞繰り上げ(QR)を特別に想定し、その後Minimalist初期にはHornstein(1995), Kitahara(1996)などが構造に基づいてこの現象を分析しているが、いずれも問題点を抱えている。

そこで、本発表ではChomsky(2001)が提案するMultiple Spell-Outを採用し、先行研究の問題点を克服した新たな分析を提示する。具体的には、IS解釈の可能性は、数量詞を含む句(節)のphasehoodに左右されるものであり、それはChomsky(2008)が提案するEdge Featureが利用されることで得られるものだと考える。これにより、近年のPhase理論に基づいて、一般的な原理から上記の事実を捉えることが可能となる。

司会 福岡大学教授 久 保 善 宏

2. 文断片における再帰形の直接生成分析

九州大学大学院博士後期課程 永 次 健 人

自然言語には、文の一部だけで文相当の意味内容を表す省略表現である文断片(Sentential Fragment)が広く見られる。以下の例に示すように、英語の再帰形は、文断片にしたとき、対応する文と同じ容認性を示す場合と異なる容認性を示す場合がある。

- (1) a. The soldiers believed themselves to be intelligent.
 b. A: Who did the soldiers believe to be intelligent?
 B: Themselves.
- (2) a. *The soldiers believed themselves were intelligent.
 b. A: Who did the soldiers believe were intelligent?
 B: Themselves.
- (3) a. *John mentioned Mary to herself.
 b. A: To who did John mentioned Mary?
 B: *(To) herself.

文断片として現れる再帰形が対応する文から削除によって派生されると考えると(削除分析)、(2)のような、文で容認されないものが文断片で容認される事実は予測できない。代わりに、文断片が表面形以上の統語構造を持たないと想定すると(直接生成分析)、文断片の再帰形はその統語構造上に先行詞を持たないことになり、このような再帰形の説明には、束縛原理Aのような統語条件を用いることができない。本発表では、削除分析の問題点と直接生成分析の妥当性を示し、文断片の再帰形が意味的条件によって説明されるべきであると論じる。

更に、文中と文断片での再帰形の容認性の違いは、Jackendoffの三部門並列モデル(Tripartite Parallel Architecture)に基づき、以下の想定により予測され、これらの想定の下、文の再帰形と文断片の再帰形を統一的に扱うことができると論じる。

- ・文中の再帰形は統語条件と意味条件によって制限される。
- ・文断片の再帰形は意味条件によってのみ制限され、統語条件は適用されない。

3. 副詞の派生に関する統語的分析

九州大学大学院修士課程 安松修平

Cinque(1999)は、副詞が機能範疇の指定部—主要部関係から認可されると主張した。

- (1) [frankly Mood_{speech act} [suprisingly Mood_{evaluative} [allegedly Mood_{evidential} [probably Mood_{epistemic} [once T (Past)... [usually ASP_{habitual}... (Cinque1999)

彼の分析によると、次の(2a)は(2b)の構造をしている。

- (2) a. She cleverly will have been avoiding this topic.
 b. [She [Mode_{evidential} cleverly [TP [T will... (Haumann 2007)

しかし、Cinqueの分析では副詞の生起位置を固定してしまうため、次の(3)を事実にして非文法的だと予測してしまう。

- (3) She'll cleverly have been avoiding this topic. (Haumann 2007)

また、副詞が文中の複数の位置に比較的自由に生起できるという事実も捉えることができない。

(4) *Cleverly she (cleverly) will (cleverly) have (cleverly) been (cleverly) avoiding him.*

(Haumann 2007)

(4)では、副詞以外の要素がより上位の位置に移動すると考えられるかもしれないが、その移動の要因が何なのか明らかでないという問題が残る。加えて、一部の文副詞が文末に生起する文の文法性も予測できない。

(5) *John will have lost his mind, probably.*

このように副詞を機能範疇と関連させる分析には多くの問題があり、従って Cinque らの分析は妥当ではないと考える。

本発表では、基本的に副詞は付加詞であるとする Ernst (2002) らの立場に立ち、最近のミニマリスト・プログラムの観点から副詞の統語的派生に関してより妥当な分析を試みる。

司会 長崎大学教授 西原俊明

4. 日英語の場所句構文に関する統語分析

九州大学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員DC2 前田雅子

本発表では、日英語の場所句構文の類似点、相違点を明らかにし、それらを統一的に統語分析することを試みる。

まず、類似点として、(1)、(2)に示すように、どちらの言語においても非対格動詞、非能格動詞が生起できることが挙げられる。

(1) a. *Among the guests was sitting my friend Rose.* (Bresnan 1994: 78)

b. *In this bed slept George Washington.*

(2) a. 空には虹が出ていた。

b. 公園にはたくさんの子供たちが遊んでいた。 (Nakajima 2001: 52)

また、(1)–(3)に示されるように、場所句が文頭に生じなければならない。

(3) ?*たくさんの子供たちが公園に(は)遊んでいる。 (Nakajima 2001: 56)

しかし、日英語には以下に示すような相違点も見られる。(4)、(5a)の対比からわかるように、英語では文否定が許されないが、日本語では非対格動詞を用いた場合は文否定が許される。ただし、日本語でも、(5b)のように非能格動詞を用いると文否定が許されない。

(4) a. **In the garden doesn't stand a fountain.*

b. **Into the room didn't walk John.*

(5) a. 空には虹が出ていなかった。

b. *公園にはたくさんの子供たちが遊んでいなかった。

また、英語には他動詞制限があるが、日本語にはない。

- (6) *Among the guests of honor seated my mother my friend Rose.
 (7) a. 机の上には誰かが辞書を置き忘れていた。 (Yamamoto 1997: 656)
 b. そこには、四季で変化する山々が私たちを迎えてくれる。

上記のような特徴に対し、本発表では、Rizzi (1997) で提案された階層化された CP 構造を発展させ、CP 領域にある TopP と vP 領域にある FocP が提示文の派生に関し重要な役割を果たすことを提案し、説明を試みる。

参考文献：

- Nakajima, Heizo (2001) “Verbs in Locative Constructions and the Generative Lexicon,” *The Linguistic Review* 18, 43-67.
 Rizzi, Luigi (1997) “The Fine Structure of the Left Periphery,” *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer, Dordrecht.

5. 英語における主語内寄生空所構文の考察

九州共立大学共通教育センター 専任講師 黒木 隆 善

英語には、(1) や (2) に示したような、寄生空所 (Parasitic Gaps: 以下 PG) と呼ばれる現象が観察される。PG は一般的に、顕在的な wh 句移動などの非項位置への移動 (A' 移動) に伴う形で、付加詞節等の島の効果が生じる節の内部に生起する (斜字体の t は主節の wh 句移動によって生じる痕跡を示し、pg は主節の wh 句移動に伴って生じる寄生空所を示している)：

- (1) Which articles did John file *t* [_{Adjunct} without reading *pg*]?
 (2) Which boy did [_{Subject} Mary's talking to *pg*] bother *t* most?

(cf. Engdahl (1983: 5))

PG 構文には、主に、(1) のように付加詞節内に PG が現れるもの (以下 APG 構文) と、(2) のように主語内に PG が現れるもの (以下 SPG 構文) の 2 種類が存在することが確認されている。

(1) に示した APG 構文の特徴を捉えるために、Chomsky (1986) や Nunes (2004)、Kasai (2010) 等で様々な分析が試みられているが、(2) の SPG 構文に関しては、APG 構文と同様の分析が提案されているものの、その特徴をうまく捉えられていないようである。

そこで本発表では、SPG 構文の認可のメカニズムに焦点をあてて議論を進める。特に、主語内に生起する PG がどのような特徴を有しているのかを観察し、また、付加詞節内に生起する PG と異なるものかどうかを検討した上で、SPG に見られる特徴を上手く捉えることのできる代案を提示することを試みる。

参考文献：

- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, Cambridge, MA: MIT Press.
 Engdahl, Elisabet (1983) “Parasitic Gaps,” *Linguistics and Philosophy* 6, 5-34.
 Kasai, Hironobu (2010) “Parasitic Gaps under Multiple Dominance,” *English Linguistics* 27:2, 235-269.
 Nunes, Jairo (2004) *Linearization of Chains and Sideward Movement*, Cambridge, MA: MIT Press.

特別講演

演題 シェイクスピア劇の「女」とポピュラー・カルチャー

講師 東京女子大学大学院人間科学研究科教授 楠 明子(くすのき あきこ)

講師プロフィール

1965年 東京女子大学文理学部英米文学科卒業

1968年 Mt. Holyoke College 大学院修士課程修了(M.A.)(英文学)

1975年 東京大学大学院博士課程単位取得満期退学

1992年 University of London (King's College) 大学院 Ph. D. (英文学)

2005年-2009年 日本シェイクスピア協会会長

現在 Shakespeare Survey (Cambridge University Press) Advisory Board Member

国際シェイクスピア学会 (The International Shakespeare Association) 執行委員

The 9th World Shakespeare Congress (2011年7月, プラハ) 大会委員

The Cambridge World Shakespeare Encyclopedia (2012年(予定), Cambridge University Press 刊) Associate Editor

主な著書

1. *Gloriana's Face: Women, Public and Private in the English Renaissance*. Harvester Wheatsheaf, 1992. (共著)
2. 『英国ルネサンスの女たち——シェイクスピア時代の逸脱と挑戦』. みすず書房, 1999年. (単著)
3. 『ゴルディオスの絆——結婚のディスコースとイギリス・ルネサンス演劇』松柏社, 2002年. (共編著)
4. *Women, Violence, and English Renaissance Literature*. Arizona Center for Medieval & Renaissance Studies, 2003. (共著)
5. 『メアリ・シドニー・ロウス シェイクスピアに挑んだ女性』. みすず書房, 2011年. (単著)

主な口頭発表

1. “Sorrow I’le Wed”: Resolutions of Women’s Sadness in *Twelfth Night* and Mary Wroth’s *Urania*, 第30回 International Shakespeare Conference, 招待発表, 2002年8月, Stratford-upon-Avon. (英)
2. “What is the cause that you thus sigh?": *Urania* と *Othello* における異文化認識, 第42回シェイクスピア学会「特別講演」, 2003年.
3. 「シェイクスピア作品からみる Lady Mary Wroth——*Love’s Victory* を中心に」, 名古屋大学2007年度サマーセミナー招待講演, 2007年7月.
4. ‘Lady Mary Wroth’s Representations of Queen Elizabeth I in *Urania* Part II’, The Renaissance Society of America 2009年次学会, 2009年3月, Los Angeles. (米)
5. 「‘Cabinet’ に保管された女性の Public Space——ジェイムズ朝におけるロマンスの変容」, 第82回日本英文学会, 招待発表, 2010年5月, 神戸大学.
6. ‘*Love’s Victory* as a Response to *Romeo and Juliet*’, Panel: Early Modern Women Playwrights, The 9th World Shakespeare Congress, 2011年7月, Prague. (チェコ)